

# バウムガルテンの受容史について

## —美学というディシプリンをめぐる批判的考察—

大澤 俊朗

### 目次

#### 1 はじめに

#### 2 バウムガルテン受容の第一フェーズ:

19 世紀後半におけるバウムガルテン自身の発見

#### 3 バウムガルテン受容の第二フェーズ:

1930 年代におけるバウムガルテンのテキストの発見

#### 4 バウムガルテン受容の第三フェーズ:

1970 年代におけるバウムガルテン思想の内容の発見

#### 5 バウムガルテン受容の第四フェーズ:『美学』刊行 250 周年

をきっかけとしたバウムガルテンの再発見

#### 6 おわりに

#### 参考文献

#### 1 はじめに

18 世ドイツの思想家アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762) は、みずからの著作のほとんどをラテン語で執筆した。うち版を重ねたのは、『形而上学』<sup>1</sup>と『哲学的倫理学』<sup>2</sup>、それから『ヴォルフ理性学にもとづく論理学講義』<sup>3</sup>という講義録だけである (1773 年に第二版)。

『形而上学』は 1739 年に初版が出て、以降 1743

年、1750 年、1757 年、1763 年、1768 年、1779 年と合計 7 版を重ねた。また、『哲学的倫理学』は初版が 1740 年であり、以降 1751 年、1763 年と合計 3 版を重ねた。かれの代表作と言われている『美学』<sup>4</sup>は、実は版を重ねていない (1750 年に第一巻が、1758 年に第二巻が出版された)。この著作が完成されないうちにかれが他界してしまったので、これはかれの遺作である。

バウムガルテンは、カントより 10 年前に生まれた、ハレとフランクフルト・オーダーという地で知的な影響力を持っていた当時の巨頭知識人だった。そして、実際カントは、バウムガルテンの著作をテキストとして講義を行っていた。このような意味で、今日におけるカントの影響に鑑みると、バウムガルテンが思想史のなかでほとんど忘却されてしまっているのはなぜなのかとの疑問が当然わいてくる。だが、両思想家のあいだの影響関係を繙くことは別稿に譲りたい。本稿の課題は、バウムガルテンの名を挙げて書かれた研究の系譜を、ひとまずはたどってみることである。

これまでにアクチュアルな論争と切り結ぶことのほとんどなかった、そして、これからもそ

<sup>1</sup> Baumgarten 1739.

<sup>2</sup> Baumgarten 1740.

<sup>3</sup> Baumgarten 1761.

<sup>4</sup> Baumgarten 1750/1758.

れはおそらく期待できないであろうバウムガルテンを、散発的になされてきたこれまでの受容のされ方のそのつどのアクチュアルな文脈とあえて関連づけてみたい。ときおりなされるバウムガルテンの受容は、議論に発展してもほとんど持続せず、それだけに、以前の受容の成果を発展的に継承することができていない。それゆえ、かれの受容をわたしたちは分断された歴史上の個々の痕跡として認めることができるだけだ、といってもけっして言いすぎではないほどなのである。それにもかかわらず、他方で、分断されずに連綿と引き継がれている一種の定数がある。それは、「美学」というディシプリンである。ここで、一般的なイメージとは齟齬をきたす大胆なテーゼを打ち出してみることにしたい。美学というディシプリンの成立は19世紀後半のできごとである。これには、すぐにつぎのような反論がなされるであろう。ディシプリンとしての美学は、18世紀にバウムガルテンが美学という言葉を発明したときに成立したのだと。だが、バウムガルテンの発見こそが実は19世紀後半のできごとだった。そして、このときより美学ははじめて、学問的ディシプリンのひとつとして認識されるようになる。すなわち、学問的ディシプリンとしての美学は、19世紀後半におけるバウムガルテンの発見によって、つまりは「18世紀なかば（厳密に言えば前半）にバウムガルテンが美学というディシプリンを発明した」という起源を設定することによって、かれ

を一種の核として再構成的に自己規定したものである。

本稿の目的は、バウムガルテンという思想家の分断された受容を個々のアクチュアルな文脈に位置づけること、そのうえで、分断されたかれの受容と美学というディシプリンの創始者としてのかれの位置づけの固定化とがどうかかわっているのかの理由を見定めることである。本稿では、バウムガルテンが受容された時期を19世紀後半、1930年代、1970年代、2000年以降の四つに分けて論じることにする。それぞれの時期どうしのあいだの期間にかれの受容が完全にストップしたという意味ではまったくないが、四つに区分されたこれらの時期には、それぞれに、バウムガルテン受容にとって決定的なできごとがあった。そして、それらのできごとの影響で成立した枠組みは、つぎの決定的なできごとに至るまでは、それぞれ基本的に再生産されているからである。かれの受容は分断されているものの、かれの位置づけは美学というディシプリンの成立と切っても切り離せない関係にある。だが、それだけではない。かれの蒙った不幸な受容のされ方は、このディシプリンをある意味で操作的に成立させることを可能にしてみいたのである。美学というディシプリンの操作的な成立とはどういうことか。結論からいえば、まずは19世紀の後半という時点で、バウムガルテンが実際に美学を提唱した18世紀なかばにこの学問的ディシプリンの起源が設定され

る。そのうえで、古代ギリシアからすでにあった「美学的な」思想をその学問的な起源を基礎にしてもう一度再構成しなおす、という二重の操作のうえにこのディシプリンが成立したということである。しかも、やっかいなことに、美学というディシプリンのこの操作的な成立が可能になったのには、かれの受容が分断されてなされているということのほかにも多層的に存在する、かれの不幸な受容のされ方がかかわっているのである。

本稿の構成は、したがってつぎのようになる。まずは、バウムガルテン受容の上記の四つの時期をそれぞれ、受容のアクチュアルな文脈という観点から個々に検討する。そのうえで、最後に、以上の考察をもとに、バウムガルテンに19世紀の後半に与えられた枠組みが再生産されつづけていること、しかしながら、逆に、18世紀のなかばより19世紀の後半にいたるまでかれが忘却されつづけてきたこと、つまりは長い忘却とそのあとの枠組みの再生産というふたつの流れのなかで、美学というディシプリンを二重に操作的に成立させることを、思想を骨抜きにされながらも許す象徴的な存在にかれがなぜなりおせてしまったのか、ということが検討される。以上のような手続きをふむ本稿は、したがって、美学というディシプリンの成立とのあいだに密接なつながりをもつ、バウムガルテン受容史についての考察である。

## 2 バウムガルテン受容の第一フェーズ：19世紀後半におけるバウムガルテン自身の発見

すでに述べたように、バウムガルテンという思想家は、19世紀後半になってようやく発見されたのだった。裏を返せば、かれを創始者に位置づけることを自己規定の端緒としている美学というディシプリンの成立は、実はそれほど古いことではなく、まさに19世紀後半のできごとなのである。バウムガルテンこそが18世紀なかばに美学という言葉そのものを考案し、それを学問的なディシプリンとして成立させたのだという当然考えられる反論も、このディシプリンが19世紀後半に成立したのだというテーゼをとおして再反論する必要がある。なぜなら、美学を学問 *scientia* として規定したというバウムガルテンの仕事がもっている見かけと、19世紀後半にそれが学問的なディシプリンとして規定しなおされたことのあいだには、大きな意味の変容が認められるからである。

折しも19世紀後半は、新カント派と呼ばれるアカデミズムの流れが台頭してきた時期であった。そしてまさに、バウムガルテンの発見は、この新カント派の動向そのものの産物なのであった。1983年にバウムガルテンの著作が三冊に分けられて有名なフェリックス・マイナー出版（Felix Meiner Verlag）の「哲学文庫」のラインナップにようやく加わった<sup>5</sup>時点で、これら三冊についての書評を書いたミュンヘンの研究者ヴォルフハート・ヘンクマン（Wolfhart

<sup>5</sup> Baumgarten 1983a, Baumgarten 1983b, Baumgarten 1983c.

Henckmann)の説明によれば、19世紀の後半から20世紀にかけての世紀の転換期に、美学に関するバウムガルテンの著作を現代語に翻訳しようという計画が持ち上がったのだという<sup>6</sup>。そして、この計画は、新カント派の主要な発表媒体だった『カント研究 (Kant-Studien)』という雑誌における地道な文献学的作業の結果生まれたものであった。カントは、有名ないわゆる三批判書を執筆するまえの「前批判期」と名づけられている時期において、バウムガルテンの著作を教科書にしてみずからの講義を行なっていたので、文献学的な作業のなかから新カント派のあいだでもバウムガルテンに対する関心が芽生えてきたのだということも必然的な流れとして理解できる。だがしかし、なぜ世紀転換期だったのか。このことには、べつのレベルでの必然性がある。それは、新カント派に特徴的な一種の科学主義<sup>7</sup>という文脈における必然性である。もちろん、新カント派内部におけるさまざまな立場の違いを消去して、学派としての傾向をひとくくりにして提示することはできない。しかしながら、それでも、この学派を大きな流れとして科学主義であると呼ぶことが許され则认为るのは、この学派に属する思想家たちが、さまざまな領域へと科学的な思考法の適用を拡大していったからである。そして、このような流れのなかから、精神科学、文化科学といった、

これまでは科学 (Wissenschaft) という概念とは結びつけて考えられてこなかった、精神的なものや文化的なものの領域をも科学的な方法で研究するという発想が生じてきたのだった。まさにこのような発想のもとでこそ、「美しいもの」にかかわる領域を科学的に探求することが要請されるようになったのである。もっといえば、美学というディシプリンの学問／科学としての成立が起こったのである。バウムガルテンの美学は、バウムガルテンの同時代における姿としては、新カント派的な意味での学問／科学ではなかった。だから、バウムガルテンの発見者が、かれが美学を「学問／科学 (Wissenschaft)」として規定した思想家であるとして位置づけたのも、バウムガルテンがみずからの美学を科学主義的に構想していたからなのではない。それは、かれの発見者自身の科学主義的発想のフィルターをつうじた再規定なのである。

ところで、ここで、Wissenschaft という語について自覚的に少し考察してみる必要があるだろう。日本語では、この語は通常、「学問」あるいは「科学」と翻訳される。『哲学歴史事典』のなかの Wissenschaft の項目における整理によれば、Wissenschaft は、ギリシア語の *epistheme* とラテン語の *scientia* という術語を中心概念として含み、古代から19世紀にかけて、「主観的な知の態度」という意味から、「ある特定の領域に関して言明することのできる知の総体」という客観的な意味へと徐々に変容していったのだという。

<sup>6</sup> Cf. Henckmann 1986, p. 420.

<sup>7</sup> Cf. Pulte 2004, pp. 922-928.

そして、カントとヘーゲルを代表者とする、観念論からポスト観念論の時代にかけて、Wissenschaft は、「普遍性、必然性、真理」を保証する、哲学体系の要としての役割を割り当てられることになる。この哲学体系そのものの機能と構造の変容こそ、19 世紀および 20 世紀における Wissenschaft 概念の根本的変容を用意する潜在的な下地だった。この変容が顕在化したのは、19 世紀の三分の二を過ぎたころのことだった。そして、それは古代からの Wissenschaft の概念からの脱却をも意味していたのである。変容を蒙った Wissenschaft を新たにしるしづけることとなったのは、「反省という特徴、実定化、脱形而上学化、自律化、操作化、問題化、条件化、仮説化、命題化、間主観化、抽象化による理論化」である<sup>8</sup>。このような変容を蒙ったあとの Wissenschaft 概念こそ、日本語において「学問」のほかに「科学」という訳語がそれに当てられるようになった事情と無関係ではないと思われる<sup>9</sup>。ともあれ、バウムガルテンが再発見されたのは、まさに Wissenschaft がドラスティックな変容を蒙った 19 世紀後半のできごとなのであった。そして、あらゆる領域に適用を拡大していく当時の科学主義的発想こそが、バウムガルテンとともに発見された、かれの提示した美

学の定義、「感性的認識についての学問／科学（scientia）」<sup>10</sup>の解釈に強く刻印を与えているのである。

バウムガルテンにおける scientia とは、およそ認識についての知のことであった。かれは、「論理的学問／科学（scientia logica）」に対して「感性的学問／科学（scientia aesthetica）」を対置し、それまでは論理的認識のみに偏っていた認識の対象の研究についての不足を補うという意味で「美学」を構想したのだった<sup>11</sup>。つまり、かれ自身の美学の構想は、認識の未踏の領野の解明という企図をもったものだった。ところが、バウムガルテンの発見者は、すでに踏みならされた美しいものや芸術の領域に科学的方法を適用する方法として「美学」を発見したという意識をもっていたため、そしてそれにバウムガルテン自身の仕事を重ねあわせたため、結局のところ、バウムガルテンはかれ自身の企図とは関係のない仕方で横領されるという結果にいたったのである。もちろん、ある思想家のテキストは時代や状況の要請とともに読み換えられるべきであるという主張ももっともである。だが、かれの場合には、受容の第一フェーズにおいてすでに完全な組み替えが起こってしまったのだ。このことの意味はこのほか重要なのであるが、

<sup>8</sup> Cf. Meier-Oser 2004, pp. 902; Hühn 2004, pp. 915-916; Pulte 2004, p. 921.

<sup>9</sup> Wissenschaft の訳語の揺れを象徴するできごととして、つぎのことは興味深い。Habermas 1968 は、1970 年に『イデオロギーとしての技術と学問』（ハーバマス 1970）というタイトルで翻訳されたのだが、同じ訳者が 2000 年に改訳して出版する際、『イデオロギーとしての技術と科学』（ハーバマス 2000）へとタイトルの翻訳が改まった。

<sup>10</sup> Baumgarten 1750/1758, §1.

<sup>11</sup> ただし、この整理自体も解釈のひとつである。この解釈の範型は、のちに論じられることになるシュヴァイツァーによって一定の仕方でもかたちづけられたのだが、1970 年代、2000 年代以降のそれぞれにおいて、それぞれべつの文脈で批判されていくことになる。本稿第四、五節参照。

それについては、のちの論述で明らかにしておくことにする。

### 3 バウムガルテン受容の第二フェーズ：1930年代におけるバウムガルテンのテキストの発見

美学というディシプリンの成立とともにバウムガルテン自身が発見されたのが 19 世紀の後半なら、かれのテキストが発見されたのはようやく 1930 年代になってからのできごとである。むしろのこと、19 世紀後半におけるかれの発見を承けて、20 世紀前半には学位論文のレベルでかれのテキストが翻訳されるということはあった<sup>12</sup>。しかしながら、バウムガルテンのもろもろの著作はかれの同時代にはいくつか版を重ねたものの<sup>13</sup>、20 世紀前半におけるかれについての学位論文の執筆者は、18 世紀に出版されたテキストに直接あたらなければならなかった（19 世紀以降、かれの著作が再版されるということもぱったりと止んでしまった）。だから、少なくとも 20 世紀前半における知識層にとって、そこどこか専門的な研究者にとってさえ、よほど自覚的でなければバウムガルテンのテキストそのものに出会うということもなかった。そのようななか、1936 年にイタリアで、かれの主著『美

学』がリプリントとして出版される<sup>14</sup>（かれの修士<sup>15</sup>論文『詩に関する省察』<sup>16</sup>は、すでに 1900 年にイタリアでリプリントとして出版されていた<sup>17</sup>）。つまり、この時点でもまだ翻訳でかれの著作を読むことはできなかったのである。

ところで、イタリアにおけるこのリプリントの出版に直接影響を及ぼしたのは、イタリアの思想家ベネDETTO・クローチェ（Benedetto Croce）である（実際にも、『美学』のイタリア版リプリントは、かれの 70 歳の誕生日を記念して出版された）。かれは 1902 年に、『表現の科学および一般言語学としての美学』<sup>18</sup>という著作を発表している。この著作は、今日の美学研究からしてもすでに高い水準にあるといえ、あるいはむしろ、網羅される範囲という点でいえば、今日の研究をはるかに上回っている。かれは、傍流の思想家にも目を配っており、バウムガルテンに関連していえば、かれによる美学の提唱以来出現した一種の美学の流行というバウムガルテンと同時代の状況をも見逃していない<sup>19</sup>。ともあれ、クローチェのこの著作は、大きく「美学」という部門と「美学史」という部門とに分かれており、美学史の部門に関してはすでに、

<sup>12</sup> Poppe 1907, Riemann 1928.

<sup>13</sup> 本稿で言及されることになる『形而上学』という著作は合計七版を重ねた（本稿 1 頁参照）。この著作は、カントが教科書として用いるほど当時は規範的な意味をもっていたのだが、それに比べると、『美学』という著作は、規範というよりもむしろ実際の影響力をもっていた。このことについては、本稿註 19 および 50 参照。なお、『美学』は再版されなかった。本稿第三節で詳しく論じられるように、それがリプリントとして出版されるのは、ようやく 1936 年になってからのことである。

<sup>14</sup> Baumgarten 1936.

<sup>15</sup> 18 世紀において「修士（Magister）」という称号がもっていた意味は、今日とは大幅に異なる。むしろそれは、今日でいえば「博士号取得（Promotion）」にあたるような価値をもっていた。今日の「修士」は、1960 年以降の大学制度において復活したのである。

<sup>16</sup> Baumgarten 1735.

<sup>17</sup> Baumgarten 1900.

<sup>18</sup> Croce 1902.

<sup>19</sup> Croce 1902 の和訳、245-257 頁参照。バウムガルテンの同時代における美学の流行については、さらに Orland 2001, pp. 258-261 を参照。

古代ギリシア・ローマを基点として再構成されたスタイルをとっている。すなわち、19世紀後半におけるバウムガルテンの発見をつうじての美学の成立後、1902年の時点ですでに、今日における美学史の叙述スタイルと大枠としてはほとんど変わらないものが確立されていたのだということを、クローチェの当の著作から確認することができる。他の事例の収集からこのことの確認を確証にまで高めるにはいっそうの調査を必要とするものの、かれが、この著作の序文において、それほど論争的な調子でみずからの企図を説明しているわけではないことから（新しい理論や主張を打ち出す思想上の重要な著作は、序文を論争的な調子で書くことが多い）、美学史の叙述スタイルの確立が、ディシプリンとしての美学の成立とそれほど時間的に隔たっていない、ということが予想できるのである。いずれにしても、かれは、19世紀後半において科学主義的に成立した美学に関心を寄せ、しかもそれを、たんなる特殊科学としてではなく、著作のタイトルにもあるとおり、一般言語学の地位にまで高めようとしたのである。つまり、かれは、「表現」という問題を科学的に考察し、それを言語の水準と同じ問題として扱うことによって、かれの哲学を構想したのだ。すなわち、かれにとって、美学はみずからの哲学の一部分の地位に収まるようなものではなく、それは、かれの哲学そのものだったのである。かれの知的卓越さと独自性は十分に考慮

しなければならないものの、20世紀の初頭の時点で、ともあれみずからの哲学を美学として構想するという態度が成立しうるような状況が整ったのである。

ところで、当の著作におけるかれのバウムガルテンについての扱いはといえば、「古色蒼然としたかび臭さ」と評されるように<sup>20</sup>、それほど高く評価された扱いではなかった。むしろ、美学というディシプリンや美学史の叙述スタイルがすでに当然のこととして前提されていたような感があり、バウムガルテンは逆に、そのなかである意味で埋もれてしまうような存在になりおせていた。つまり、バウムガルテンは、美学の創始者としての地位を象徴的には維持されつづけるものの、この時点で、美学や美学史のなかですでに相対化されつつあったのである。それにもかかわらず、クローチェは、およそ30年後の1933年にバウムガルテンの『美学』を再度読み、この著作を公に知らしめようという動機をもつにいたった<sup>21</sup>。その結果が、1936年におけるバウムガルテンの『詩に関する省察』および『美学』のリプリントとしての出版である<sup>22</sup>。もちろん、実際の意味でバウムガルテンのテキストが公に知られるようになるためには、難解なかれの著作が何としてでも現代語に翻訳される必要があった。ところが、かれのもろもろの著作が難解であるがゆえに、翻訳が出版される

<sup>20</sup> Cf. Henckmann 1986, p. 420 (Croce 1933 からの引用)。

<sup>21</sup> Cf. Croce 1933 (Henckmann 1986, p. 420 の指摘)。

<sup>22</sup> 本稿注 14 および 17 を参照。

までにはさらに数十年を要することになる。そして、その間に、クローチェが1930年代にバウムガルテンのテキストを公に紹介しようと考えた動機に影響を与えていたはずの時代状況も変化していくことになる。

そうはいうものの、ここで、クローチェのその動機のありかをわずかながらでも探ってみることにしたい。結論からいえば、それは、学問あるいは科学の「危機」という意識である。この時代のヨーロッパにおける知識人の例にみれば、かれもまた、政治的状況の危機という現実と直面していた。かれの場合にその危機はファシズムであり、状況は、1925年にかれが「反ファシスト知識人宣言」<sup>23</sup>という宣言文をイタリアの新聞において公表しなければならないほど切迫していた。折しも同時代には、ナチス政権のもと、学問的な営為がいっそうの危機にさらされていたドイツにおけるユダヤ系知識人の窮状があったのだった<sup>24</sup>。ともあれ、20世紀初頭の時点で、美学として構想されるみずからの哲学を提示していたかれは、学問／科学の危機をひしひしと感じていた1930年代に、バウムガルテンの美学をふたたび呼び起こす必要を見て取ったのである。こうして、ひとまずはバウムガルテンの著作がリプリントとして出版されることによって、それまでのような、専門的な研究

者がかぎられた図書館で18世紀の出版物に直接あたらなければならなかったような状況からはかなりの程度解放されたのである。かなりの程度というのは、直接にバウムガルテンを研究対象として扱う研究者にとってのことというだけではなく、広くアカデミズムにおける情報の流通という観点からの大きな影響力、あるいはその潜在的な可能性という意味でのことである。

すでに述べたように、かれの著作は、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期において翻訳の計画が持ち上がったのだった。しかし、その実現は、1936年におけるリプリントの出版にもかかわらず、さらに40年弱の歳月、すなわち1973年における『美学』の翻訳の出版<sup>25</sup>を待たなければならなかったのである。とはいえ、そのまえにも、1954年にはアメリカで『詩に関する省察』の翻訳が出版された<sup>26</sup>。この翻訳は、この修士論文が比較的短いものだったからこそ可能だったのだと想像されるのだが、「美学」という語が『美学』出版前の1735年の時点ですでに（そしてはじめて）登場した著作としての特権的な地位が、そののちの「美学」言説の確立の過程のなかで暗に機能していくことになる。しかし、アメリカでなされたこの仕事の成果は、さしあたってはドイツ語圏の研究にはあまり影響を及ぼさなかった。また、1961年には、今度

<sup>23</sup> Manifesto degli intellettuali antifascisti, in: *Il Mondo*, 1.5.1925.

<sup>24</sup> たとえば、この窮状における危機意識の影響を直接に受けて書かれたものとしては、ユダヤ系哲学者エドムント・フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（Husserl 1996）がある。

<sup>25</sup> Schweizer 1973. この文献は、『美学』の翻訳を含む研究書である。この翻訳は、ほぼかたちを変えずに、1983年にフェリックス・マイナー出版の『哲学文庫』のひとつ（Baumgarten 1983b）として再登場することになる。本稿3、13頁参照。

<sup>26</sup> Baumgarten 1954.



はドイツのゲオルグ・オームス出版 (Georg Olms Verlag) が、ついに『美学』および『形而上学』(後者のリプリントは1969年になってから。この著作は、バウムガルテンの美学思想にとって重要な基礎的概念がすでに提出されている著作として、ドイツにおけるこのリプリントの出版以降、あくまで美学言説のなかでの位置を与えられていくことになる) のリプリントを出版するにいたる<sup>27</sup>。1936年に嚆矢を与えられた、バウムガルテンの著作のリプリントの出版の流れは、のちのバウムガルテン研究、ひいては美学というディシプリンのさらなる展開(展開するなかで、ディシプリンの基本的性格そのものはいっそう固定化していった)を準備するものだったのである。

#### 4 バウムガルテン受容の第三フェーズ: 1970年代におけるバウムガルテン思想の内容の発見

19世紀から20世紀への世紀の変わり目に計画が持ち上がったバウムガルテンの翻訳は、1973年になってからようやく日の目を見た。スイスのバーゼルの研究者ハンス・ルドルフ・シュヴァイツァー (Hans Rudolf Schweizer) による翻訳がそれである<sup>28</sup>。しかし、まさに同じ時期にドイツのミュンスターの研究者ウルスラ・フランケ (Ursula Franke) も、バウムガルテンについての研究を進めており、1971年に彼女は

『哲学歴史事典』の「理性に類比的なもの」<sup>29</sup>の項目を執筆し<sup>30</sup>、同年に『認識としての芸術——アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテンの美学における感性の役割』<sup>31</sup>というバウムガルテンについての研究書を出版することになる。そのようななか、シュヴァイツァーの翻訳が出た翌年の1974年に、彼女はすぐさまこの翻訳に対して書評のかたちで応答することになる<sup>32</sup>。ライプニッツ学者であった彼女は、バウムガルテンが使う個々の術語のシュヴァイツァーによるドイツ語への翻訳が、ライプニッツ＝ヴォルフ哲学というコンテキストをふまえていないと批判する。そして彼女によれば、シュヴァイツァーがむしろ引きずられているのは、ハインリヒ・バルト (Heinrich Barth) やヘルベルト・マルクーゼ (Herbert Marcuse) の提示する、当時の新しい思潮なのだった。マルクーゼについて彼女はとくにそれ以上言及していないが、バルトの「現象の哲学」を例にとり、シュヴァイツァーはバウムガルテンの思想をそれに近いものにしてしまうと彼女は主張する。彼女の定式化するところによれば、シュヴァイツァーはバウムガルテンの理論を、芸術として具体化される以前の美的な世界経験についての理論とし

<sup>29</sup> 「理性に類比的なもの」とは、事物の連関を判明に表象する理性に対して規定された、それを渾然と表象する能力のことである。そのように事物を表象すると、表象された対象は美的なものとして認識される。詳しくは、松尾1987、488-489頁(訳註)、松尾1990、小田部1990を参照。

<sup>30</sup> Cf. Franke 1971.

<sup>31</sup> Franke 1972.

<sup>32</sup> Franke 1974.

<sup>27</sup> Baumgarten 1961, Baumgarten 1969.

<sup>28</sup> 本稿註25参照。

て捉えようとしていたというのである<sup>33</sup>。これは、バウムガルテンについての彼女の基本的な捉え方と矛盾する。なぜなら、彼女にとって、バウムガルテンは美学、すなわち、今日の通念ではほとんどそれと同一のものと考えられている芸術の哲学の創設者だったからである。バウムガルテンを何よりも美学者として考えようとする根拠として彼女が挙げるのは、『詩に関する省察』というかれの修士論文の内容である。彼女によれば、この論文は、「詩学」の哲学的な基礎づけをその内容としていた。そして、何よりもこの論文でこそ、「美学」という語が、新しい学問／科学をしるしづける概念としてはじめて打ち出された。したがって、それに連なる『美学』という著作は、新しい学問／科学ディシプリンの宣言以外の何ものでもないというのである<sup>34</sup>。これは、バウムガルテンについて今日では当然のこととして前提とされているような考え方である。

ところで、新しいディシプリンとしての美学というこのような考え方は、19世紀後半にバウムガルテンが発見されたとき以来の考え方ではなかったのか。たしかにそうではある。だが、そのときには、美学は芸術を対象とする学問／科学というよりも、広く経験的、実証的に考察されてきた生の領域にも適用されうる科学的な

方法として発見されたのだった。それが20世紀に入ると、クローチェによって、言語学に連なるものとして構想される独自の哲学にまで形成されたのだった。しかし、この時点でも、美学というディシプリンは芸術の哲学であるという限定を受けていたわけではなかった。このディシプリンが最初から（バウムガルテンをも含めて）そういう限定を受けていたかに見えるのは、第二節で論じた *Wissenschaft* の場合と同じく、ある特定の時点における美学の概念が、美学史の叙述のされ方そのものを刷新してしまうことが起こりうる、ということと関係がある。そして、21世紀に生きるわたしたちにとってもなお強い刻印を与えつづけているのは、1970年代に起こった上記の美学概念の切り縮めなのである。そして、この切り縮めをある意味で象徴的に代表していたのが、バウムガルテンの翻訳者シュヴァイツァーを批判したフランケだった。その結果、美学というディシプリンの性格は、バウムガルテンの受容史における美学概念の切り縮めによって直接に変容を蒙ることになった。ディシプリンの性格が変われば、その歴史を叙述する仕方にもそれに連動して変化する。美学をめぐる以上のような連鎖の過程は、19世紀後半にバウムガルテンが発見されて以来、そのつどの支配的なバウムガルテン受容のあり方によってつねに更新されてきた。もちろん、美学そのものの概念および美学史の書き換えという事態は、バウムガルテンという思想家の受容のみを原因

<sup>33</sup> 「当時の新しい思潮」をふまえて、フランケがシュヴァイツァーの翻訳を批判する以上のあらましの詳細については、Franke 1974, pp. 273-275 を参照。

<sup>34</sup> Cf. Franke 1974, p. 274.

として引き起こされてきたとは言えないだろう。だが、それにもかかわらず、かれの象徴的な地位は、美学の概念と大きく連動して変容していることはたしかなのである。

それでは、このように美学の概念を切り縮めなければならないという要請がなぜ内面化されたのか。それは、さきの第三節で論じたクロウチェの場合と同じく、文脈は異なるものの、この場合もまたしても「危機」の意識である。さきに触れた、彼女が1974年にシュヴァイツァーの翻訳に対して書いた書評は「バウムガルテンの美学はアクチュアルたりうるか」というタイトルなのだった。だが、シュヴァイツァーがバウムガルテンに依拠して、「夢」や「かりそめの印象」をも「美的可能性」のうちに含め、他の種類の美的認識と同様にまじめに扱われるべきであるとする主張を一蹴するというように、どういうわけか、何かに対して防衛的であるような姿勢を彼女はとっているのである。結局のところ、彼女は、シュヴァイツァーが、拡張された美的意識を理論化するために、形而上学的に理解された芸術美を基礎づけるというバウムガルテンにおける問題を回避しているのだといい、「芸術美の形而上学」なるものを擁護する側にまわる<sup>35</sup>。つまり、この書評論文は、タイトルに対する否、すなわち、時代の要請を受けた、シュヴァイツァーの新たな美学の理論化に対する否、という回答をもって締めくくられている

のである。

1975年に出版されたものの、シュヴァイツァーの翻訳よりもまえの1972年に開催された「国際ライプニッツ会議」での発表が元になっているフランケの論文「形而上学から美学へ」<sup>36</sup>では、「芸術の真理」は「形而上学的真理」に對置させられるべきではなく、むしろ前者が後者を補完する機能を担っているという論が打ち出されている<sup>37</sup>。「芸術の真理」対「形而上学的真理」という対立は、実はシュヴァイツァーに対して向けられた批判と同型である。シュヴァイツァーは美的意識を無節操に拡張したと非難されたのだが、この「形而上学から美学へ」という論文では、「不条理なもの」、「醜いもの」が、誤って美的真理に含められたカテゴリーとして標的になっている。バウムガルテン自身が、「美しいものは形式的には醜く、醜いものは内容的には美しく表現されうる」と述べていることを彼女自身承知しているにもかかわらず、である。彼女がこの矛盾に対して処するのは、さきに述べた、「芸術の真理」を「形而上学的真理」に對置させるというモデルを廃棄し、前者が後者を補うというモデルを提唱するという仕方によってである。つまり、両者を對置させることによって前者が分を越えてはびこってしまうために、後者が最終審級として前者を制御しなければならないのである<sup>38</sup>。いずれにせよ、フランケが

<sup>36</sup> Franke 1975.

<sup>37</sup> Cf. Franke 1975, p. 236

<sup>38</sup> Cf. Schweizer 1975, pp. 235-236.

<sup>35</sup> Cf. Franke 1974, p. 278.

「夢」、「かりそめの印象」、「不条理なもの」、「醜いもの」などの要素に対する執拗なまでの防衛的姿勢をとりつつ、それでもバウムガルテンに依拠して一種の美学の自律化を押し進めたのは、美学や芸術の「危機」という意識がつねにまわりついて離れなかったからである。それは、シュヴァイツァーの試みたような美学の拡張に対する防衛的反応でもあっただろうし、あるいは、実際に制作される「芸術における新しい傾向」<sup>39</sup>を目の当たりにするということに対する意識的、無意識的防衛でもあっただろう。なぜなら、「芸術における新しい傾向」を体験することをつうじて「美的体験の拡張」が獲得される、という展開を彼女は拒否しているからである<sup>40</sup>。彼女にとって、「芸術の真理」は「形而上学的真理」を補うのみで、けっして真理を拡張するなどという暴挙に出てはならないものなのである。

実は、フランケ自身は「危機」という言葉を実際に用いているわけではない。だが、「バウムガルテンの美学、およびかれによって基礎づけられたディシプリンの危機」<sup>41</sup>というタイトルで、図らずもフランケとシュヴァイツァーのそれぞれの著作についての書評論文を書いたリンクフルトの研究者ブリギッテ・シェアー (Brigitte Scheer) は、ふたつの著作を、美学あ

るいは芸術の危機という意識によって動機づけられたものとして分析した。ただし、彼女が正當にも分析しているように、フランケの場合の防衛的な危機意識とは違って、シュヴァイツァーの場合には、「美的なるものあるいは美学的なるもの一般の (überhaupt) 一般的な (allgemein) 危機」という危機の意識なのだった。つまり、学問的／科学的に認識することと芸術家としてかたちづくること、美的な活動と芸術家としてかたちにすることのあいだの差異という、美学どころか科学学問一般にとっての現在の問題、すなわち一般的にいえば「美的生産性の危機」という問題は、特定の時代の問題ではないまさに普遍的／一般的な問題なのである<sup>42</sup>。バウムガルテン自身もまた、『美学』において、美的主体の創造性すなわち美的生産性を問題にしていたのだった<sup>43</sup>。

フランケとシュヴァイツァーとの対立は、前者が一方的に後者に対して放った論難であったのだが、とりあえずこれを、シュヴァイツァー-フランケ論争と名づけることにしたい。この論争と同型の似たような論争は、ほかの文脈でもあったのかもしれない。そして、それが、べつのさまざまな論客を巻き込んで展開していく、ということもあったのかもしれない。ところが、シュヴァイツァー-フランケ論争はとくにそれ以上展開せず、それだけに、両者の主張それぞ

<sup>39</sup> Cf. Franke 1974, p. 273. なお、のちにとりあげる Orland 2001, p. 264 も、2001 年の時点において、同時代の芸術傾向についてバウムガルテンの思想と関連づけて論じている。さらに Menke 2001, p. 229 は、「芸術的ではない表現や経験の仕方」に対して芸術理論がもつ関係という問題を取りあげている。

<sup>40</sup> Cf. Franke 1974, p. 273.

<sup>41</sup> Scheer 1976.

<sup>42</sup> Cf. Scheer 1976, pp. 118-119.

<sup>43</sup> Cf. Baumgarten 1750/1758, §27.

れの一部分が継ぎはぎのようにして温存されていく結果となったのである。しかも、論争の内容をふまえれば露呈するはずの矛盾も、矛盾ではまったくなくなってしまう。たとえば、「芸術の真理」あるいは「美的真理」対「形而上学的真理」という図式、そのなかで前者に独自の理論を確立した自律的な学問／科学としての美学というシュヴァイツァー流の評価が温存される一方で、このディシプリンはかれの考えていたような一般的な問題を扱う学問／科学ではなく、もっぱら芸術のみを対象とする、という意味で自律的な学問／科学である、というフランケ流の評価が温存される。フランケ流の評価に関しては、そこに、「芸術の真理」を「形而上学的真理」に奉仕させるという一種の形而上学主義が潜んでいたのであるが、それは都合のよいように忘れ去られ、たんに、バウムガルテンの『形而上学』という著作が『美学』における思想の基礎をなすという評価に落ち着くのである。つまり、つぎのような定式が今日流通しているのであるが、そこにはとりたてて矛盾は見分けられない。バウムガルテンはそれまでの「形而上学的真理」の優勢に対して「美的真理」の独自の価値を見だし、それを哲学的に基礎づける自律的な学問として美学を成立させた。美的真理の対象とは、具体的には芸術である。この学問の成果をかれは『美学』という著作にまとめたのだが、その基底にあるのは『形而上学』という著作で提示されているかれの哲学の基本的枠組みであ

る。シュヴァイツァー-フランケ論争の記憶を消去したこのようなかたちのバウムガルテンの受容の範型は、そののちしばらく、あるいはほとんど今日にいたるといってもよいほどに、温存され再生産されつづけていくことになる。バウムガルテンの著作が翻訳された1970年代以降でさえ、かれの受容がいわば知的市場で散発的になされ、しかも論争的な広がりをほとんどみせず終息していくというのがつねだったからこそ、このような状況は成立したわけである。

## 5 バウムガルテン受容の第四フェーズ：『美学』刊行250周年をきっかけとしたバウムガルテンの再発見

バウムガルテンの主著『美学』は、2000年に刊行から250年目の節目を迎えた（正確には、美学の第一巻が発表された1750年から250年目。第二巻は1758年に出版。本稿1頁参照）。もちろん、この著作が翻訳された1970年代以降も、かれを何とか理解可能な思想家にするために、さまざまなアプローチが試みられた。とくに、かれの修士論文である『詩に関する省察』、『形而上学』、『美学』という美学というディシプリンに深くかかわる著作（『形而上学』と『美学』に関しては部分訳として。もちろんのこと、かれの著作はこれらだけではない）が有名なフェリックス・マイナー出版の「哲学文庫」のラインナップに加わった1983年<sup>44</sup>以降は、かれについての研究が比較的頻出するようになる。それ

<sup>44</sup> 本稿註5参照。

でもやはり、かれは容易な思想家ではなかった。すでに確認したように、バウムガルテンの同時代のほかは 19 世紀の後半にいたるまでほとんど研究の蓄積がなかっただけでなく、1970 年代にいたるまで現代語への翻訳さえない状況であったわけだから、1983 年以降に研究が増えたといっても、それらはいくぶん恣意的にならざるをえないのであった。自然科学的世界観に対する反省という新カント派を思わせるような問題関心や<sup>45</sup>、「美しくない芸術」に直面しての美学の再考という、前節で検討したフランケを連想させるようなそれも依然として散見される<sup>46</sup>。これらの問題は、ある意味で一般的にアクチュアルなのだろう。

だが、1983 年以降のバウムガルテン研究の大きな動向は、何といても「解釈学」、「記号論」という文脈に引き寄せたかれの解釈だろう。この動向は、ハンス＝ゲオルク・ガダマー (Hans-Georg Gadamer) の影響を多分に受けていた。しかもそれは、バウムガルテンの生きた地ドイツでよりもむしろ、英米圏や日本で顕著に認められる傾向であった<sup>47</sup>。第三節でも触れたように、アメリカでは、1954 年にすでに、『詩に関する省察』が翻訳されていたのであった<sup>48</sup>。日本はといえば、哲学文庫というかたちでかれの著作にアクセスしやすくなった 1983 年後の

まさに 1987 年に、何と『美学』の全訳が出たのである<sup>49</sup>。さきに論じたシュヴァイツァーの翻訳でさえ、全訳ではなかった。バウムガルテンのラテン語の難解さは、19 世紀後半の受容の第一フェーズどころか、バウムガルテンの同時代からしてすでにクリシェのようになっていたのである<sup>50</sup>。しかしながら、『美学』の日本語訳の成果は、バウムガルテン研究者、あるいはかれに関心をもつひとびととして考えられる共同体のなかでは言語上の理由で流通しなかった。ともあれ、1980、90 年代のバウムガルテン受容を特徴づけるキーワードは「解釈学」や「記号論」である。ところが、バウムガルテンの実際の著作では両者ともけっして中心的な概念であるわけではなく、「記号論」の場合にいたっては、何と、書かれることなく構想だけで終わった『美学』第 I 部第二章のタイトルなのである。解釈によっては、かれにおける「記号論」の意味を重視することもありうるだろうが、それでも、解釈学や記号論という当時の知的流行に沿ったバウムガルテンの受容の仕方はやはり牽強附会であった観を免れないのである。したがって、本稿の論述のなかでは、バウムガルテン受容の第四フェーズのメルクマールとして、『美学』刊行 250 周年にあたる 2000 年に生まれた研究動向を位置づけることにする。

2001 年、アカデミー出版 (Akademie Verlag)

<sup>45</sup> Cf. Jäger 1984, esp. p. 3.

<sup>46</sup> Cf. Solms 1990, esp. p. 10.

<sup>47</sup> Cf. 小田部 1988, Davey 1989, 黒崎 1990, 小田部 1995, Markreel 1996.

<sup>48</sup> 本稿註 26 参照。

<sup>49</sup> バウムガルテン 1987.

<sup>50</sup> Cf. Reiss 1993, p. 110.

から出ている有名な哲学雑誌が、バウムガルテンについての特集を組んだ<sup>51</sup>。特集のタイトルは、「アレクサンダー・G・バウムガルテンの美学のアクチュアリティについて」<sup>52</sup>というものである。バウムガルテンについて雑誌で特集が組まれるなどということは、筆者の知るかぎりではそれまでになかったことである。『美学』刊行以来に通過したこれまでの節目では、そのような反省の機運が生まれるべくもなかった。なぜなら、ほんの50年前には現代語の翻訳さえない状況だったからである。節目の年2000年の翌年の時点で、それまでにバウムガルテンについての研究が成熟してきているとはけっしていえないものの、前節で論じた1973年における『美学』の翻訳の成立と1983年における「哲学文庫」への進出をおもなきっかけとして、とにかくにも、それまでの研究状況に比べればはるかに多い数の研究が（それでも散発的ではあるとはいえない）生まれてきたのである。そして、当の雑誌特集において基調的な文章を書いてこの特集の共通認識を代表しているクリストフ・メンケ（Christoph Menke）というドイツのポツダムの研究者が述べるところから判断するに、そこでは少なくとも、1973年以降のバウムガルテン研究の状況に対する総括的な反省が行なわれている。つまり、いつのまにか成立していた、美学は芸術の理論であるというという認識（一部は

前述のフランケに由来するような）に対する反省がひとつにはある。また、メンケが「フォイエールパッハマルクーゼ調」と名づけている悟性対感性という単純化された図式<sup>53</sup>に対する反省がもう一方のものである。つまりメンケは、シュヴァイツァー-フランケ論争のなかから対立点を消去されて温存されてきたバウムガルテン美学のふたつの定型的議論に対しての反省という視座をもっていたのである<sup>54</sup>。

当の雑誌特集では、本稿で論じてきたような、19世紀後半と1930年代におけるバウムガルテン研究の状況に対する視点は残念ながらない。しかしながら、ともあれこの雑誌特集における論客たちは、1970年代以降定型化され陳腐になったバウムガルテンについての議論に反省の機運を持ち込もうとしたのである。そして、そのようななかで、かれらは新しいモデルを提示する。それは、「プロジェクトとしての美学」というパースペクティブである<sup>55</sup>。つまり、美学の対象になる芸術と対象にはならない経験の対立、美的真理と形而上学的真理の対立、あるいは悟性対感性の対立といったような、あれかこれかの対立ではなく、真に弁証法的な対立<sup>56</sup>だけが

<sup>53</sup> これは、フランケが批判した、シュヴァイツァーの提示した「美的真理」と「形而上学的真理」の対置に連なっている。まさにこれこそ、1970年代の時点でフランケがハイネリヒ・バルトとヘルベルト・マルクーゼの論調に引きずられている図式として批判したものなのだった。本稿第四節参照。

<sup>54</sup> Cf. Menke 2001, pp. 229-230. もっとも、かれらはふたつの定型的議論の淵源をフランケとシュヴァイツァーに意識的に位置しているわけではない。

<sup>55</sup> Cf. Menke 2001, p. 230.

<sup>56</sup> 「哲学的美学の言説」は二重の言説である。それは特殊な焦点をもち、一般的な地平をもっている。すなわち、哲学的美学は特殊な、まさに「美的な」表現や経験の仕方についての分析を

<sup>51</sup> *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 49/2, Akademie Verlag, Berlin 2001.

<sup>52</sup> Menke 2001.

問題であるような、バウムガルテン哲学の生成そのものの表現としての「美学」、哲学プログラムとしての「美学」という発想<sup>57</sup>である。だから、フランケが述べていたような、美学という言葉そのものやその思想の淵源が『詩に関する省察』のなかにあり、だからそれこそがすでにバウムガルテンの本質だとする主張<sup>58</sup>はもはや有効ではなくなる。メンケは逆に、バウムガルテン美学は伝統的詩学や修辞学の置き換えではなく、それをさらに記述すること、それどころか、その書き換えだったというのである<sup>59</sup>。そして、その過程がもっともよく表現されているものこそが、『美学』という著作である。

ところで、この2000年以降のバウムガルテン受容の新フェーズは、第三、四節で検討したようなかれの受容の結節点につきものの「危機」の意識をまたしても再生していた。この意識は、

行なうのだが、その際同時に、それは表現や経験一般のロジックについてのわたしたちの理解の仕方をも変化させるのである。さらにいえばこうなる。哲学的美学はあるひとつのあり方の美学であり、かつもうひとつのあり方の美学である、というだけではない。それは、ひとつのあり方の美学であるかぎりでは——表現や経験一般の新しい理解の仕方としてあるかぎりでは、

(そしてそれだからこそ) もうひとつのあり方の美学なのである。なぜなら、それは表現や経験の特殊形態についての分析なのだから。これこそが、美学という言説を定義している、普遍と特殊の弁証法である。この弁証法が、美学を哲学的ディシプリンとして規定している。たしかに、この美学はひとつの美学、あるいはもうひとつの美学のどちらかに傾きがちなということもありうるだろう。また、それは表現や経験の特殊形態

(bestimmte Gestalten) についての特殊理論 (spezielle Theorie) だけであることや、あるいは、もっぱら表現や経験の一般的理論である、ということをも望んでいるのかもしれない。しかし、この哲学的ディシプリンとしての美学は、ふたつのあり方の美学がたがいに均衡を欠いているようにも、両者が同時にあるということ、両者のうちのどちらか一方でありうるのである」(Menke 2001, p. 229、強調はメンケ)。

<sup>57</sup> Cf. Groß 2001a, p. 13.

<sup>58</sup> 本稿第四節冒頭の整理を参照。

<sup>59</sup> Cf. Menke 2001, p. 230.

先述の哲学雑誌上でのバウムガルテン特集の論客のうちのひとり、ベルリンの研究者エバーハルト・オートラント (Eberhard Ortland) の論文<sup>60</sup>に見て取ることができる。かれによれば、(現在は2000年からまだそれほど隔たっていないものの、かれにとっての) 今日の芸術理論は、観念論的美学に特徴的な総合という性格の衰退のために、芸術の産出的な側面ばかりを肥大させて理論化している。だが、「全体」という見地から美学を考えるならば、観念論的美学によって周辺に追いやりられただけでなく今日の芸術理論も打ち捨ててしまっているような、経験の領域をももう一度美学のうちで考えるべきではないか。だから、何が美的経験で何がそうでない経験なのかという「美的差異」に汲々としている今日の芸術理論は再考に付されるべきである。

ある意味での経験の全体性を捉えるには、したがって、それを最初に周辺に追いやった観念論以前の美学、すなわちバウムガルテンの美学に立ち返るべきなのだ。かれは、このように主張している。このような意味で、かれが「危機」と呼んで定式化しているのは、観念論あるいはポスト観念論 (これは、文脈上今日の芸術理論のことを指すのであろう) が、前観念論的な美学に取り組まなければならない、その古色蒼然とした構築物に体系としての関心をもたなければならないときに生じる危機である<sup>61</sup>。つ

<sup>60</sup> Ortland 2001.

<sup>61</sup> Cf. Ortland 2001, pp. 262-263.



まり、美的差異の探究が極端にまで押し進められて先鋭化した、芸術や美学の自律化に自覚的になったときに生じる危機意識である。

一方、この時期に別様に感じとられた危機意識もある。同特集のべつの論客シュテフェン・W・グロース（Groß, Steffen W.）という当時はオックスフォードの、現在はドイツのコットブスの研究者<sup>62</sup>の提起する倫理的な危機意識である。もっとも、かれは、「危機」という言葉を直接用いているわけではないが。かれにとって、今日（これもまたかれにとっての今日であるが、かれの提起する危機は現在でもなおアクチュアルである）の危機は、科学や技術の「進歩」に直面して操作することが可能になった人間の危機である。具体的にかれが挙げるのは、遺伝子研究などの新しい分野の成果がもたらしうる危機である。そこでかれは、ある種の人間の「全体性」という概念を持ち出してくる。その際、かれは、バウムガルテンにおける「創造的な美的主体」という概念を援用することによって、産出的でありながらも、自己に対してある種の規制を課す動因をも含み込んでいる倫理的主体としての人間の存在のあり方を規定したのである<sup>63</sup>。

結局のところ、オートラントにしてもグロー

スにしても、危機意識に触発されて対抗的に提示したのはある種の「全体性」だった。そしてこれは、観念論的な「総合」という発想に対するアンチテーゼであったし、芸術や美学だけでなく、科学や技術（ラテン語の *ars* という語では、芸術と技術というふたつの意味はそれぞれ、まだそれほど明確に区別されていたわけではなかった）が自律化していくことに対するアンチテーゼでもあった。そして、かれらは、バウムガルテンの著作を網羅して思想の全体像を捉えることが可能になるほど研究の水準はまだ進んでいないものの、つまり、何はともあれ、本稿で言及した『詩に関する省察』、『形而上学』、『美学』以外の諸著作の現代語への翻訳の整備を前提とすることができそうな環境が整うことがまず肝要であるとはいえ、「プロジェクトとしての美学」という示唆的な観点を提起することによって、ディシプリンとしての美学の創始者はだれか、そしてその人物はいつ美学という語を使うようになったのか、などという起源遡及への退行的な強迫をひとまずは一掃してくれたのである。その結果、かれの哲学的な営みそのものを美学というプロジェクトとして考えることによって、かれの思想の全体像を捉えようという機運がわずかながら生まれたのである<sup>64</sup>。

<sup>62</sup> 同特集においてグロースが書いている論文は、Groß 2001b である。

<sup>63</sup> グロースと「創造的な美的主体」という主題については、詳しくは大澤 2005 を参照。また、グロースの議論は危うい楽観主義に陥る危険性をはらんでいるのだが、それについては大澤 2006 を参照。

<sup>64</sup> 何と、昨年（2007年）、『美学』のドイツ語での全訳が歴史上はじめて出版された（Baumgarten 2007）。本稿で何度か言及された、フェリックス・マイナー出版の「哲学文庫」のラインナップとしてである。この翻訳は、チュービンゲンのダグマール・ミルバッハ（Dagmar Mirbach）という新しい世代の研究者によってなされた。この翻訳をきっかけとして新しい研究動向が生まれることが期待されるところである。ただし、またしても『美

## 6 おわりに

本稿は、「美学」というディシプリンをつくった人物ということでは比較的良好に知られている（ある一定の文脈では）にもかかわらず、一般的な了解としてはなぜそのままのかたちで再生産されつづけているのか、というバウムガルテンという思想家についての基本的な問いにまじめに取り合ってみようという動機から書き起こされた。いくらまばらだとは言え、かれについての研究が一定数存在してきた以上、そして、何よりも「美学」と名指されるものと同型の思考をわたしたちはくり返し問いかけてきた以上、かれの思想が「原型」をとどめているということなどはありえようはずもないのである。かれの受容史を調べていくと、案の定、受容のなかにひずみがあるのだということが判明した。それどころか、バウムガルテン自身が19世紀後半の発見物であること、それにともなって、美学というディシプリンもまたこの時期にはじめて成立したのだということが明らかになった。その後の受容史をさらに追っていくと、1930年代、1970年代、2000年以降というそれぞれの時期が、かれの受容におけるある意味での結節点だったということが判明したのだった。これらそれぞれの結節点には、具体的な決定的できごとがあ

ったのと同時に、それぞれのできごとを促すような、あるいは必然的なあり方で並行的に潜んでいた、時代状況のなかの問題意識があったのである。だが、バウムガルテンの場合にやっかいなのは、かれの研究が傍流のまた傍流である以上やむをえないことなのだが、受容が散発的でかつ分断されており、個々の研究者のなかでは受容における継承関係がほとんど意識されないということである。だが逆に、ディシプリンとしての美学はそれだけにいっそう隠微に、しかもかれが美学の創始者という象徴的な地位をかれの思想内容を抜き取られつつ連綿と継承されてきただけに、なおのことある意味で強固な地盤を獲得していったのである。

本稿でみてきたように、かれの著作を読むことが信じがたいほどに困難であるため、リプリントとしては1930年代、現代語訳にいたっては1970年代によく成立するというように、かれの研究をとりまく環境の改善の歩みはきわめて遅々たるものだった。一方で、バウムガルテンについては、18世紀の後半から19世紀の後半まで、ほとんど研究の蓄積がないまま放置されてきたのだった。つまり、一世紀ものあいだの長い忘却という重い代償を背負ったまま、受容が開始されるや否や分断につぐ分断がくり返されるうちに一世紀の忘却があった事実さえ忘れ去られ、逆にかれを創始者の地位に鎮座させておくことだけは維持されるという構図が成立したのである。こうしたねじれのなかで、バウ

学』の翻訳であるため、依然として「美学」の言説のうちで議論されることになってしまわないか危惧される。バウムガルテン思想の全体を捉えることができるようにするために、他の著作の翻訳が待たれるところである。本稿執筆者はとりわけ、かれの同時代に『形而上学』に次いで多くの版を重ねた『哲学的倫理学』（Baumgarten 1740、本稿1頁参照）という著作こそが重要だと考えている。

ムガルテンは美学というディシプリンの創設者であり、「美学史」とは、古代ギリシア以来当然のごとく存在した美学的な思想を叙述することである、という今日では一定の文脈で「常識的な」理解が成立したのである。だがこれには、かれを淵源に設定する19世紀以降の操作と、操作のうえに成り立っている歴史叙述の操作という二重の操作が介在していた。さきに述べた受容史における結節点には、本稿で論じたように、つねにさまざまな文脈での「危機」の意識がともなっていた。そしていずれの場合でも、何らかのかたちで起源（この場合には、もちろんバウムガルテン）を志向するということが共通していたのだった。バウムガルテンという思想家を研究していくうえで、わたしたちは、この起源への志向なるものについて十分に思索していく必要があるだろう。バウムガルテン受容にお

ける二重の操作を成り立たせているものの秘密は、どうやらそこにありそうなのだから。本稿では、その屈折した志向の因ってきたところをたぐり寄せるための糸口としては必要不可欠な、バウムガルテン受容史の見取図が提示された。もちろん、まだほんの糸口でしかないことは認めないわけにはいかない。だが、かれの生涯や思想、およびかれを始点とする美学史がこれまでに散発的ながら書かれてきたにもかかわらず、かれの受容史については、不思議にも、ほとんどと言っていいほど書かれたことがなかった。この意味で、本稿は、微力ながらもバウムガルテン研究に一石を投じた。そして、この試みは、本稿で論じたように、美学というディシプリンそのものを再考に付す必然性をもともなっているのである。

## 参考文献

### 1. バウムガルテンの著作（オリジナル）

- Baumgarten, Alexander Gottlieb (1735): *Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*, Halle.  
 Baumgarten, Alexander Gottlieb (1739): *Metaphysica*, Hemmerde, Halae Magd. (1. Auflage).  
 Baumgarten, Alexander Gottlieb (1740): *Ethica philosophica*, Hemmerde, Halle (1. Auflage).  
 Baumgarten, Alexander Gottlieb (1750/1758): *Aesthetica*, Frankfurt a. O.  
 Baumgarten, Alexander Gottlieb (1761): *Acroasis Logica*. In *Christianum L. B. de Wolff*, Hemmerde, Halae Magd. (1. Auflage).

### 2. バウムガルテンの著作（リプリント）

- Baumgarten, Alexander Gottlieb (1900): *Meditationes philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus*, Ristampa dell' unica edizione del 1735, a cura di Benedetto Croce.  
 Baumgarten, Alexander Gottlieb (1936): *Aesthetica. iterum edita ad exemplar prioris Editionis annorum MDCCL-LVIII spatio impressae. Praepositae sunt Meditationes Philosophicae de nonnullis ad poema pertinentibus, ad eodem auctore editae anno*

MDCCXXXV [Lat. Texte bosorgt von Tommaso Fiore, Einführung von Alessandro Casati]. Bari apud. Jos. Laterza et Filios  
MCMXXXVI [Benedetto Croce zum 70. Geburtstag].

Baumgarten, Alexander Gottlieb (1961): *Aesthetica*. Reprograph. Nachdruck der Ausgabe Frankfurt a. O. 1750, Olms, Hildesheim/New York.

Baumgarten, Alexander Gottlieb (1969): *Metaphysica*. Reprograph. Nachdruck der 7. Auflage Halle 1779, Olms, Hildesheim/New York.

### 3. バウムガルテンの著作 (翻訳)

Baumgarten, Alexander Gottlieb (1983a): *Philosophische Betrachtungen über einige Bedingungen des Gedichtes*. Lateinisch-deutsch. Übers. und mit einer Einleitung von Heinz Paetzold (=Philosophische Bibliothek, Bd. 352), Felix Meiner, Hamburg.

Baumgarten, Alexander Gottlieb (1983b): *Texte zur Grundlegung der Ästhetik*. Lateinisch-deutsch. Übers. und hg. von Hans Rudolf Schweizer (=Philosophische Bibliothek, Bd. 351), Felix Meiner, Hamburg.

Baumgarten, Alexander Gottlieb (1983c): *Theoretische Ästhetik*. Lateinisch-deutsch. Die grundlegenden Abschnitte aus der 'Aesthetica' (1750/1758) (=Philosophische Bibliothek, Bd. 355), Felix Meiner, Hamburg.

Baumgarten, Alexander Gottlieb (1954): *Reflections on Poetry*. A. G. Baumgarten's 'Meditationes...' translated with the original text, an introduction and notes by K. A. Aschenbrenner and W. B. Holther, Berkeley/Los Angeles.

バウムガルテン (1987): 『美学』松尾大訳、玉川大学出版局

Baumgarten, Alexander Gottlieb (2007): *Ästhetik* (2 Bde.). Lateinisch-deutsch. Übersetzt, mit einer Einführung, Anmerkungen und Registern herausgegeben von Dagmar Mirbach (=Philosophische Bibliothek, Bd. 572a), Felix Meiner, Hamburg.

### 4. 研究書および雑誌論文

Croce, Benedetto (1902): *Eстетика come scienza dell'espressione e linguistica generale*, Bari; Dt.: Ästhetik als Wissenschaft vom Ausdruck, üb. von H. Feist, in: Croce, Benedetto, *Gesammelte philosophische Schriften*, Reihe 1, Bd. 1, Tübingen 1930 (クロ一チエ『美学: 世界大思想全集 46』(世界言語学名著選集第1巻)、長谷川誠也・大槻憲二訳、ゆまに書房、1998年(初出は1930年)) .

Poppe, Bernhard (1907): A. G. Baumgarten. *Seine Bedeutung und Stellung in der Leibniz-Wolffschen Philosophie und seine Beziehungen zu Kant. Nebst Veröffentlichung einer bisher unbekannten Handschrift der Ästhetik Baumgartens*, Leipzig.

Riemann, Albert (1928): *Die Ästhetik A. G. Baumgartens unter besonderer Berücksichtigung der 'Meditationes...' nebst einer Übers. dieser Schrift*, Halle.

Croce, Benedetto (1933): Rileggendo l'Aesthetica del Baumgarten, in: *La Critica* 31, pp. 2-19.

Habermas, Jürgen (1968): *Technik und Wissenschaft als Ideologie*, Suhrkamp, Frankfurt a. M..

ユルゲン・ハーバマス (1970): 『イデオロギーとしての技術と学問』北川章子、長谷川宏訳、紀伊国屋書店

Franke, Ursula (1971): Artikel "analogon rationis", in Ritter, Joachim (Hg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 1, pp. 229-230.

Franke, Ursula (1972): *Kunst als Erkenntnis. Die Rolle der Sinnlichkeit in der Ästhetik des Alexander Gottlieb Baumgarten*, Steiner, Wiesbaden.

Schweizer, Hans Rudolf (1973): *Ästhetik als Philosophie der sinnlichen Erkenntnis. Eine Interpretation der "Aesthetica" A. G.*

- Baumgartens mit teilweiser Wiedergabe des lateinischen Textes und deutscher Übersetzung*, Schwabe & Co., Basel/Stuttgart.
- Franke, Ursula (1974): Ist Baumgartens Ästhetik aktualisierbar? Bemerkungen zur Interpretation von H. R. Schweizer, in: *Studia Leibnitiana* 6/2, pp. 272-278.
- Franke, Ursula (1975): Von der Metaphysik zur Ästhetik. Der Schritt von Leibniz zu Baumgarten, in: *Studia Leibnitiana Sppl.* 14/3, pp. 229-240.
- Scheer, Brigitte (1976): Baumgartens Ästhetik und die Krise des Ästhetischen, in: *Philosophische Rundschau* 22/1-2, pp. 108-119.
- Jäger, Michael (1984): *Die Ästhetik als Antwort auf das Kopernikanische Weltbild. Die Beziehungen zwischen der Naturwissenschaft und der Ästhetik Alexander Gottlieb Baumgartens und Georg Friedrich Meiers*, Hildesheim/Zürich/New York.
- Henckmann, Wolfhart (1986): Rezension der Ausgabe Paetzold 1983 u. d. T.: "Neue Ausgaben von Baumgartens Ästhetischen Schriften", in: *Philosophisches Jahrbuch* 93, pp. 420-423.
- 小田部胤久 (1988): 「記号結合術としての芸術——レッシングと18世紀記号論的美学」谷川渥編『記号の劇場』昭和堂所収、113-142頁
- Davey, Nicholas (1989): Baumgarten's Aesthetics: a Post-Gadamerian Reflection, in: *British Journal of Aesthetics* 29/2, pp. 101-115.
- 黒崎政男 (1990): 「ドイツ観念論と18世紀言語哲学——記号論のカント転換点説」『講座ドイツ観念論』(第6巻)、弘文堂所収、283-323頁
- 松尾大 (1990): 「バウムガルテンの『美学』における理性の類比者の概念」『成城文芸』131、成城大学文芸学部、1990年所収、16-30頁
- 小田部胤久 (1990): 「『理性に類比的なものの術』の誕生と変容——バウムガルテンからドイツ観念論にいたる美学の展開とその原理」『講座ドイツ観念論』(第6巻)、弘文堂所収、61-113頁
- Solms, Friedhelm (1990): *Disciplina Aesthetica. Zur Frühgeschichte der ästhetischen Theorie bei Baumgarten und Herder*, Stuttgart (Forschungen und Berichte der Evangelischen Studiengemeinschaft, 45).
- Reiss, Hans (1993): Die Einbürgerung der Ästhetik in der deutschen Sprache des achtzehnten Jahrhunderts oder Baumgarten und seine Wirkung, in: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 37, pp. 109-138.
- 小田部胤久 (1995): 『象徴の美学』東京大学出版局
- Husserl Edmund (1996): *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*. Herausgegeben, eingeleitet und mit Register versehen von Elisabeth Ströker (=Philosophische Bibliothek, Bd. 292. 3.), Felix Meiner, Hamburg (Original erschien 1936) (エドムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫、木田元訳、中公文庫、1995年(初出は1974年))。
- Markreel, Rudolf (1996): The Confluence of Aesthetics and Hermeneutics in Baumgarten, in: *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 54/1, pp. 65-75.
- ユルゲン・ハーバマス (2000): 『イデオロギーとしての技術と科学』長谷川宏訳、平凡社
- Menke, Christoph (2001): Schwerpunkt: Zur Aktualität der Ästhetik von Alexander G. Baumgarten, in: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 49/2, pp. 229-231.
- Groß, Steffen W. (2001a): *Felix Aestheticus. Die Ästhetik als Lehre vom Menschen. Zum 250. Jahrestag des Erscheinens von Alexander Gottlieb Baumgartens 'Aesthetica'*, Königshaus & Neumann, Würzburg.
- Groß, Steffen W. (2001b): Felix Aestheticus und Animal Symbolicum. Alexander G. Baumgarten - die "vierte Quelle" der Philosophie Ernst Cassirers?, in: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 49/2, pp. 275-298.
- Ortland, Eberhard (2001): Ästhetik als Wissenschaft der sinnlichen Erkenntnis. Ansätze zur Wiedergewinnung von Baumgartens

## 402 バウムガルテンの受容史について

uneingelöstem Projekt, in: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* 49/2, pp. 257-274.

Meier-Oser, Stephan (2004): Artikel "Wissenschaft", in Ritter, Joachim u.a. (Hg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 12, pp. 902-915.

Hühn, Helmut (2004): Artikel "Wissenschaft", in Ritter, Joachim u.a. (Hg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 12, pp. 915-920.

Pulte, Helmut (2004): Artikel "Wissenschaft", in Ritter, Joachim u.a. (Hg.): *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd. 12, pp. 921-952.

大澤俊朗 (2005) : 「バウムガルテンのアクチュアリティー 刊行 250 周年を迎えた『美学』を現在において再考することの意味」『クアドランテ [四分儀]』第 7 号、東京外国語大学海外事情研究所、2005 年所収、355-365 頁

大澤俊朗 (2006) : 「いびつな横領：ポストマン『18 世紀への橋渡し』のドイツにおける受容の問題性」『クアドランテ [四分儀]』第 8 号、東京外国語大学海外事情研究所、2006 年所収、227-240 頁

(おおさわ としろう・東京外国語大学大学院博士後期課程)